

論文要旨

学位論文題目 トリシャ・ブラウン(Trisha Brown 1936-2017)研究 ―舞踊作品創作と一人ひとりの身体―
氏 名 白澤 舞

トリシャ・ブラウンは、ジャドソン・ダンス・シアター(1962-64)の創設メンバーとして知られる。1970年に自身の舞踊団 Trisha Brown Dance Company(以下 TBDC)を設立し、半世紀にわたり旺盛な舞踊作品の創作を続け、世界的に評価される振付家である。本研究では、ブラウンの舞踊作品創作における理念、すなわち創作の動機や原動力となる彼女の関心や創作の意図を明らかにすることを目的とした。

ブラウンが行った舞踊作品の創作活動は多様で幅広い。1960-70年代の作品は、前衛的な芸術運動に精通していない当時の観客の多くにとっては「これがダンスなのか」と思われるような実験的なものであった。一方、1979年以降の作品は、伝統的な劇場空間で舞台美術や音楽を伴い、多くの観客にダンスとして享受された。2004年にはパリ・オペラ座バレエ団への振付提供やオペラ作品の振付・演出を手掛け、2005年にはバレエ分野の芸術家に贈られる世界的な権威をもつブノワ賞を受賞した。

こうした作品の斬新さや活動の変化の多様さから、ブラウンに関する研究は外観的で部分的なものが多い。初期の実験的作品と劇場舞踊作品を縦断的に検討した研究はわずかで、舞踊作品創作に通底する考え方は十分に検討されていない。しかし、ブラウンは「私は問い、分析と回答という実践を、自らのキャリアを通し(中略)ダンスを通じて続けてきた」ⁱと述べている。また、彼女の作品創作は、彼女が関心を持つ事象に関する探求の提示だと指摘されるⁱⁱ。すなわち、彼女の舞踊作品創作における理念を理解するためには、彼女が創作活動を通じ継続して抱いてきた関心と、その関心についての探求、そこから得た回答を解明することが重要であると考えられる。

そこで本研究では、ブラウンが初期の活動から継続して関心を抱き、舞踊作品創作において探求を続けてきたキーワードの中から、彼女が一貫して舞踊作品の前面に打ち出してきたといわれる「身体」ⁱⁱⁱに注目した。彼女がどのように「身体」への関心を生じさせ、作品創作を通していかに「身体」を探求し、「身体」についてのいかなる理解を得たのかを問題意識とし、彼女が作品創作過程や身体訓練においてダンサーの「身体」をどのように捉え、扱い、作品を生み出し続けたのかを通時的視点から包括的かつ実証的に検討することで、彼女の舞踊作品創作における理念の根幹に迫ることを目的とした。

研究方法は、既に言語化された資料からの検討に加え、筆者が実際に身体訓練法や作品創作を学ぶクラスに参加するという実践を通して体感を得、その体感に基づいて実践者たちへインタビューをすることにより再言語化した資料からの検討という二方向からの考察が有効であると考えた。なぜなら舞踊は身体の実践であり、厳密に言語化することが難しいからである。また、舞踊家自身によって既に言語化されている資料を理解する上でも、身体感覚や捉え方に関わる言説については、実践による体感に基づかなければ、本人の意図を正しく解釈するのは難しいと考えたためである。そこで、文献調査および実地調査による資料を基に考察を行った。実地調査は TBDC で開講されている教育プログラムの参与観察と指導者へのインタビュー、TBDC の公演に向けたスタジオリハーサルの観察を行った。

第一章では、ブラウンの生い立ちから様々なダンスや人との出会いと学びに着目した。彼女は幼少期に身につけた型に囚われない身体感覚ゆえに、大学で伝統的なモダンダンスの様式を学ぶと身体的違和感を覚えた。そこで自分の身体が固有であることに気づき、身体への探求心を目覚めさせた。彼女は先駆的指導者らから学び、舞踊における探求の試みが作品創作として成り立つと理解した。また、仲間との活動により彼女の関心を明確にした。さらに、ボディワークの考え方を学び、一人ひとりの身体が持つ能力を最大限に発揮できるように調整するという身体訓練のあり方と作品創作において新しい舞踊語彙の創出を可能にする彼女の動きの方式を確立し、振付家としての活動を展開していったと捉えられた。

第二章では、ブラウンが初期の実験的作品において行った身体の探求を概観した。彼女は実験的作品により、人間の身体は各々異なる経験や能力があり、思考や感性といった精神的な固有性を持っているばかりでなく、解剖学的・生理学的特徴に至るまで肉体的にも唯一無二であることを提示し理解していった。また、意味や物語性が無くても、身体が持つ応答する機能によって、感動したり意味を見出すことを提示し理解した。実験的作品は彼女に明快で有意義な学びをもたらした一方、多くの観客にとっては難解で、創作の意図が十分に理解されないという課題が顕わになったことが明らかになった。

第三章では、ブラウンの代表作《Set and Reset》(1983)を中心に、劇場舞踊作品の創作過程に着目し、彼女が確立させた創作手法の特徴を明らかにし、実験的活動で得た知識と技能および課題を劇場舞踊作品の創作にどう反映させたかを検討した。彼女は作品創作において、ダンサーや他領域の芸術家、観客に至るまで一人ひとりの異なる人格・身体の創造性が発揮されるコラボレーションを行った。彼女の予測を超えて作品が発展し身体の新たな理解をもたらすことを求めた。この創作手法により追究するほどに広がる身体の可能性が更なる探求心を引き起こし、次の創作の原動力となることが示唆された。

第四章では、ブラウンの身体に関する知識と技能がどのように実現され得るのかに着目し、TBDCの教育プログラムの参与観察により、ブラウンが創作手法を成立させるダンサーにどのような訓練を行い、どのような身体を求めたのかを検討した。ダンサーは、自分の身体が持つ固有性を解放し、身体内外において明確な感覚と意図を持って動きを生み出せるよう訓練した。それにより、あらゆる動きに一人ひとりのダンサー独自の動きの質を持たせ、舞踊の形式として提示することをめざした。つまり、ブラウンはダンサー一人ひとりに、さまざまな環境下で自分の身体の固有性を発揮させ、舞踊形式の動きを創作することができる自律的で主体的な思考を持った身体を獲得するよう求めたと考察した。

以上から、初期の実験的作品から劇場舞踊作品に至るまで、ブラウンにとって舞踊作品創作は、空間に存在する一人ひとりの人間の身体が、周囲の環境との関係のなかで、いかなる精神的・肉体的固有性を持ち、知覚し動いているのかを解明する尽きない探求であり、踊る者をも見る者をもその探求へと招き入れるよう提示する試みであったと考察した。

ⁱ Brown, Trisha (2002) "How to Make A Modern Dance When The Sky's The Limit", in Teicher, Hendel (ed.) *Trisha Brown: Dance and Art in Dialogue, 1961-2001*, p.293.

ⁱⁱ Baner, Sally (2007) *Before, Between and Beyond: Three Decades of Dance Writing*, p.86.

ⁱⁱⁱ Paxton, Steve (2002) "Brown in The New Body", in Teicher(ed.), p.57.